

ドイツ思想詩の黎明——ハラール「スイス詩歌の試み」

(1) 序言

高橋克己

人文学部独文研究室

内容梗概

はじめに

(一) ドイツ思想詩の黎明

- (1) 序言
- (2) 新旧の相克
- (3) 美と崇高
- (4) 博識と探求
- (5) 認識記述の創作
- (6) 幽魂の國
- (7) 結語

二(44)頁—四(46)頁

後日刊行予定

註・解
Zum Verständnis dieser Arbeit
五(47)頁—一〇(52)頁
一一(53)頁—一二(54)頁

※実際の詩歌作品として(2)では「朝の想」(Morgen-Gedanken) (一七二五年)と「哀歌 (Trauer-Ode)」(一七三六年)、(3)では「アルペン山脈 (Die Alpen)」(一七二九年)、(4)では「理性、迷信、不信仰についての考へ」(Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben) (一七二九年)、(5)では「悪の根源に關して」(Über den Ursprung des Übels) (一七三四年)、(6)では「永遠にいつの未竟詩 (Urvollkommenes Gedicht über die Ewigkeit)」(一七三六年)を念頭に置いている。

敢て「神の心の中には完璧な裂け目」(vollkommener Riß im göttlichen Begriff)と読みたい所であるが、当の「悪の根源について」第一書の第一四一句は本来、「神の心の中には完璧な計画 (Riß) があつたのではないか?」と云う疑問文である。蓋し「完璧な計画」が此所では疑問視されている故に、どうしても何らかの「裂け目 (Riß)」が覗かざるを得ない。もし唯一絶対なる超越者の「完璧な計画」を雄弁に開陳するに過ぎぬならば単なる教訓詩に留まるのだが、倦むことなく探求するハラールの問いかけはそれ以上のものを目指し、畢竟「スイス詩歌の試み」は何時とはなしに思想詩へと高まりゆくことになる。かくして十八世紀ドイツ抒情詩の新たな歩みは、一重に文飾豊かな詩想展開にのみ感せず、また心の外で多彩な体験の渦に巻き込まれることなく、むしろ意識の淵へと熟慮省察を幾重にも織り成して徐々に沈み深まりゆくのである。

わが國では古来、花鳥風月や有情の生を謳う詩歌の伝統が強いので、概ね十八世紀ドイツ抒情詩歌研究においても、とかく自然詩や体験詩および諷刺詩とか歌曲へと関心が向き易く、どちらかと云うと意識の内観で想念が多岐にうねる思索と探究の抒情の調べは敬遠されがちな趨勢にある。だが抒情と思想という言葉は水と油の如き二律背反をも敢て対話せんとする十八世紀ドイツ思想詩の脈動を伝える十九世紀ドイツ音楽の大交響曲ならば、わが國においても相当に深い理解に基づいた観賞が成立し得ているのであるから、要はドイツ思想詩を学術上の表現で以て如何に生き生きとした思念の脈動として伝えるかに在る。そのためには「思想」を「教訓」へと下落させないよう修辞上の能弁に流れず、心に魂として生ける理念追求の歩みを慎重に辿らねばならない。故に詩学はここで敢て存在論とか認識論と言ひ得る哲学知あるいは形而上学知の領域に踏み込んでゆくことになるのである。

〔一〕 ドイツ思想詩の黎明

(1) 序言

文学辞典⁽¹⁾の類や抒情詩史⁽²⁾の叙述によると、ハラール(一七〇八年―一七七年)の詩歌は「教訓詩(Lehrdichtungとか Lehrgedicht)」と命名されている。すると読者の中には、この命名だけにより早合点して、説教臭い道徳家の雄弁を想い浮かべてしまう人もいることだろう。実は私もその一人だった。しかも最初に私が「ハラールの教訓詩(Lehrgedichte)」⁽³⁾という命名に触れたのは、十八世紀ドイツ文学史の上で著名な詩論『素朴文学と情感文学について』(一七九五年―一七九六年)であり、この詩論の著者シラー(一七五九年―一八〇五年)は相当地厳しく「ハラールの教訓詩」を批判している。どうも真実この厳しい批判は同時に誰よりシラー自身に向かっているようなのだが、当初はその脈絡が読み取れず、「抽象概念が君臨(der abstrakte Begriff herrscht)」⁽⁴⁾「分別悟性(Verstand)が感受性(Empfindung)を支配」⁽⁵⁾している「ハラールの教訓詩」では、「従って作者が概ね表現より教訓を事とし」⁽⁶⁾て、「美にまで高まったことは稀有か皆無であった」⁽⁷⁾という件など読んだ折には、作品そのものに直接触れようともせず、シラーの権威と雄弁に圧倒されてしまっていたのが現状であった。

但し気になっていた事は、カントやヘーゲルが好んでハラールに言及する点であった。殊にカントはハラールを「ドイツ語圏の詩人のうちで最も崇高な詩人(der erhabenste unter den deutschen Dichtern)」⁽⁸⁾と絶讃し、かの大著『純粹理性批判』(初版一七八一年、六一三頁)で、「永遠を、かくも畏怖と崇高にみちめて(so schauerhaft erhaben)ハラールのよう

に描く⁽⁹⁾と述べている。またヘーゲルの『小論理学(Enzyklopädie)』(一八三〇年)でも、このハラールの代表作「永遠についての未完詩」(一七三六年)から「神の無限(Unendlichkeit Gottes)に関する有名な記述描写」⁽¹⁰⁾が取り上げられる。蓋し、この哲学者たちに詩才が乏しい点を考え併せれば、抒情よりも教訓へと傾く学究の姿勢の帰結として、この脈絡を納得することができた。つまり哲学書では「抽象概念が支配」し「分別悟性が感受性に君臨」するのが普通だからである。

だが、文才あるレッシング(一七二九年―一八一年)の場合は、シラーと同じくハラールに対して厳しい。例えば美学芸術論文『ラオコオン』(一七六六年)第十七章では、ハラールの著名な自然詩『アルペン山脈』(一七二九年)の植物描写(初版・第三八節、決定版・第三九節)が話題とされる。

このような詩にあの誇大な賛辞を呈する批評家は、全くまちがった視点からそれを眺めたのに相違ない。彼は、詩人がそのなかに織りこんだしらしらしい裝飾や、植物の生活の高尚めかした表現や、外面の美をただの入れ物にしている内的完全性の発展などをひたすら重視して、美そのものとか、画家や詩人がわれわれに与えることのできる形象の鮮かさや迫真性の程度などは、あまり顧みなかったのにちがいない。

たとえ哲学史上の両雄がいくら親しみをこめて言及したとて、所註は文芸上の達人たちによりハラールは見限られている。という風に私は判断したのであった。

ところが「外面の美」のみならず、「内的完全性の発展」(註(8))においても瞠目すべき「パンとぶどう酒」(一八〇〇年―一〇一年)というヘルダーリン(一七七〇年―一八四三年)の思想詩で話題となるキリスト像を考量しつつ、西欧精神史を振り返りながら、全体どうも「罪」や「悪」の問題が無視できぬようだと思ひ始めた時、ハラールの全六〇六句に互る長詩「悪の根源について」(一七三四年)は、ライブニッツ(一

六四六年—一七二六年)の『弁神論(Theoidee)』(一七二〇年)と並んで私の関心を牽くこととなった。そこでハラー唯一の詩集『スイス詩歌の試み(Versuch Schweizerischer Gedichte)』(初版一七三二年)の諸詩篇に直接触れ驚いたことには、単なる教訓詩人に留まらぬ思想詩人シラーの先駆者がここにいるという発見であった。確かに名著『ドイツ文学史』でマルテューニが、「彼とともにあの力強い思想詩(Gedankendichtung)が始まり、それはシラーにおいて円熟の域に達した」と述べている通りである。つまりハラーとシラーとは本質上分かち難く結びついており、前掲の『素朴文学と情感文学について』の論述(註(3)―(4))でシラーはハラーに託して、実は同時に厳しい自己批判の試みを企て、自らの詩作の限界を突き破ろうとしていると言ふことである。

ところで、ドイツ抒情思想詩(Gedankenlyrik)⁽¹²⁾生育の歩みは、「ギリシアの神々」初稿(一七八八年)や『芸術家』(一七八九年)とか『幽魂の国』(一七九五年)や『エレゲイオン』(一七九五年)など一連の壮年期シラーの長詩を盛夏の如き繁茂の証左とし、やがて『パンとぶどう酒』や『平和の祝祭』(一八〇一年)など円熟期ヘルダーリンの雄篇において言わば収穫の秋を迎えたと考えられる。そこで春の曙なす抒情詩歌を何処に見るかであるが、当のシラーとヘルダーリンが共に模範として尊敬し熱心に取り組んだ先駆者はクロプシュトゥック(一七二四年—一八〇三年)であった。

それはピンダロスの雄飛を追う脆弱な飛躍なのか? それはい
クロプシュトゥックの偉容(Klopstockgroße)を求める奮闘努力なのか?
(ヘルダーリン「わが決意」一七八七年頃、第三節、第十一句—第十二句)

ドイツの詩人は此所で古典ギリシアの歌人と肩を並べる迄に至る。正に

四五 ドイツ思想詩の黎明——ハラー「スイス詩歌の試み」(高橋)

当のクロプシュトゥックこそドイツ思想詩の歴史において、言わば妙なる麗しの五月(Wunderschöner Monat Mai)を彩る抒情詩人と看做され得よう。

ヘルダーリンの関心圏から十八世紀ドイツ詩歌を瞥見すると、クロプシュトゥックとシラーの生彩が余り強すぎて、他の詩人たちはその影に隠れてしまう。あたかも思念溢れるシラーの雄篇の燦然たる輝きの下でゲーテの体験詩や自然詩が色褪せてしまうように、カントにより「最も崇高なドイツ詩人」(註(5))とまで称讃されたハラーの姿とて「クロプシュトゥックの偉容」に完全に圧倒されている観がある。ところがシラーの『素朴文学と情感文学について』においては、ハラーが「理念によりわれわれを感動させる」⁽¹³⁾「いわゆる「情感詩人(sentimentalische Dichter)」の代表として少なからず言及される。ところで、ここでの論述が興味深いのは、前述の如く、クロプシュトゥックやハラーと並んで実は言外に自ら自身のことを念頭に置きつつシラーが筆を走らせている点である。つまり自らと本質上異質な「素朴詩人(naive Dichter)」を論じるが如き対象化された客体が話題なのではなくて、論者シラー自身と内奥で分かち難く結びついた詩歌の本質が探求され表現されんとしている故に、叙述内容は常ならぬ緊張と重量を増し、厳しい批判と同時に高い要請が詩業に対しなされていると考えられるのである。

「思想そのものが詩歌象徴(der Gedanke selbst poetisch)」⁽¹⁴⁾となるのをシラーは究極と考えるのであるが、この場合に二様ある。その一つは、ゲーテの抒情作品に見られるように「取り扱う概念を純粹かつ完全に個性(Individualität)へと引き下げたが如き詩歌」であり、これは思想詩の傍系と言えよう。他方「取り扱う概念を純粹かつ完全に理念(Idee)へと引き上げたが如き詩歌」こそ、本論が目指す本来の思想詩と考えられる。例えば前者なら『西東詩集』(一八一九年)所収のゲーテ(一七四九年—一八三二年)の代表作『至福への憧れ(Selige Sehnsucht)』

(一八一四年)や『再会 (Wiederfinden)』(一八一五年)を、後者ならヘルダーリンの『生のなかば (Halbte des Lebens)』(一八〇二年—〇三年)や『追想 (Andenken)』(一八〇三年)を筆頭に挙げることができ。

当該のハラール、クロプシュトック、シラーが思想詩人として歩む道は自ずと後者ヘルダーリンの作品へと繋がり、この三者の労作は十八世紀ドイツ思想詩生育の多彩な展開を示す。そして然かるべき思想詩人の課題を、シラーの当論文は相対明確に意識したと考えられる。故にこの「素朴文学と情感文学について」においてハラールについて語られていることは、「理念への飛翔¹⁸⁾」とか「力と深さと悲壯な嚴肅さ」あるいは「偉大、果敢、情熱、崇高」などの賛辞のみならず、「抽象概念が君臨」(註(3))とか「分別悟性が感受性を支配」(註(4))あるいは「詩歌芸術 (Dichtkunst) は概念の領域や分別悟性の世界では繁栄できない」¹⁹⁾ などという批判が、程度の差こそあれ皆クロプシュトックやシラー自身にも悉くあてはまるのである。

この三者のうちでハラール(一七〇八年生)の活躍時期が最も早い。既に一七三〇年代にスイス人ハラールはドイツ語圏で著名な詩人となった。その後クロプシュトック(一七二四年生)は一七五〇年頃に、シラー(一七五九年生)は一七八〇年代に文壇に頭角を現わすことになる。従ってドイツ思想詩の黎明期を一七三〇年代とし、ハラールの詩集『スイス詩歌の試み』再版(一七三四年)をその確証と見ることが出来る。そして、この黎明期ハラールの成果を、十六世紀のルターと十七世紀のオーピッツの業績に比するほど「詩歌の言葉 (Sprache der Poesie)」²⁰⁾として称揚した後継者クロプシュトックの詩歌類を、ドイツ思想詩の曙光を彩る作品群と考えるのが適切であろう。かくしてハラールからクロプシュトックをへて、更にシラーからヘルダーリンへと雄飛するドイツ思想詩の歩みは、「理念によりわれわれを感動させる」(註(15))と言われる一筋の

熟慮省察なす詩作の道として立ち現われ、シラーやヘルダーリンの成果を理解する上でも、まずハラールの『スイス詩歌の試み』を留意しておくのが有益と考えられる。確かにこれは詩人自身の控え目な言葉通り「試み (Versuch)」(註(10))、ハラール自身のもう一つの母国語ならエッセイ (essai) とか習作 (étude) あるいは実験 (experience) と言う所であろうが、この試金石を礎として以後十八世紀の数十年に互り内面性豊かなドイツ思想詩が綿々とヘルダーリン円熟期に至るまで歌い継がれ、西暦十八・十九世紀の転換期にまで彩り豊かに継承発展されようなどは、恐らく「試み」たハラール自身予想だにできなかったことであろう。

註 解

〔一〕 ドイツ思想詩の黎明

はじめに

※ 歴史批判版ドイツ国民文学、第四一巻、第二分冊(フライ編)一八八五年頃、三修社写真複製一九七四年、ハラール選集、九二頁。ハラール詩選(註)(5)五八頁。

神の心の中には完璧な計画があり、それは被造物の幸福に反しもしなかったのではないか?

(第一四一句―二句)

当フライ編九一頁脚註にも、またエルシェンプロイヒ編『ハラール詩選』(註(5))の五八頁の脚註にも、当該の詩語に関して「見取図(Grundriss)計画(Plan)」と説明が附してある。

(1) 序 言

(1) マイヤー文学辞典、再版、一九七〇年、三七六頁。「教訓詩(Lehrgedichte)と政治小説がハラールの創作の核心をなしている。」

(2) ダルプ叢書ルートolf・ハラール著『ドイツ抒情詩史』第一巻(一九六七年)、第一篇「啓蒙時代」、第四章「教訓詩(Lehrdichtung)」(二二八頁―二四三頁)の後半(二三五頁―二四三頁)は当アルブレヒト・ハラールに関する叙述である。

(3) ヴァイマル版シラー全集、第二〇巻、一九六二年、四五三頁。

(4) 右記(註)(3)の第二〇巻、四五四頁。

(5) カント「天界の一般自然史と理論」(一七五五年)第二部、第七章。ズールカンツ版十二巻作品集、第一巻、一九六八年、三三五頁。学芸院版作品集(註)(6)、第一巻、三三四頁。

※ なおレクラム文庫版『ハラール詩選』(ヒルツェル編一八八二年版『ハラール詩集』に依る)(一九六五年)の「結語」(エルシェンプロイヒ著)には、「ハ

ラーはカントにとり、ドイツ語圏のあらゆる詩人のうちで最も崇高(Haller für Kant der „erhabenste unter allen deutschen Dichtern“) (一一四頁)と引用されているが、他にプロイセン学芸院版カント全集(第一部、第一巻、一九一〇年、三三四頁)にもカッシーラ版カント作品集(第一巻、ブーヘナウ編、一九二二年、三二七頁)にも「あらゆる(alien)ではなく定冠詞(den)で「ドイツ語圏の詩人のうちで最も崇高(der erhabenste unter den deutschen Dichtern)」とあり、しかも各々の異本校合(五五八頁と五三二頁)に別例が見当たらないことから、右記レクラム文庫版での引用は正確と考えられる。因みに文庫版一一四頁には残念ながら、典拠も当のカントの著作「天界の一般自然史と理論」の名も挙げていない。

(6) カント作品集、プロイセン学芸院版に依る写真複製版、一九六八年、第三巻、四〇九頁。「純粹理性批判」再版、一七八七年、六四一頁。

(7) ヘーゲル作品集、一八三二年―四五年版を底本、一九六九年―七一年(索引は一九七九年)、第八巻、二二〇頁。第一〇四節の補遺。

※ なお『大論理学』(一八二二年)第一書、第一章、第二巻、Cのb(右作品集、第五巻、二二六頁)にも当詩節が引用。

(8) レッシング作品集、一九二五年刊「五部作品集に依る写真複製版、一九七〇年、第四巻(第四部)、三六八頁。岩波文庫「ラオコオン」斎藤栄治訳、一九七〇年、二二四頁―二二五頁。

(9) 筆者の別論「ヘルダーリンの西欧ギリシア論——「至福なるギリシア」(一九八四年度/八五年度/八六年度・高知大学学術研究報告、第三三巻/第三四巻/第三五巻、人文科学篇、一三頁―七二頁/一頁―七二頁/一頁―一六六頁所収、一九八五年三月/八六年三月/八六年十二月刊)参照。

(10) 『ハラール詩選』(註(5))の「結語」に見られるように、通例は語頭を小文字にして形容詞部(schweizerisch)を表記(九八頁)されるが、別レクラム文庫版「詩歌と解釈(Gedichte und Interpretationen)」第二巻「啓蒙主義と疾風怒濤」(一九八三年)の七一頁、およびメッツラー研究叢書(Sammlung Metzler)第五七巻「ハラール」(一九六七年)の三三頁から三四頁にかけての記載によると、原典は初版(一八三三年)から第十一版(一七七七年)に至るまで全て形容詞部が語頭を大文字表記にしていることが解かる。なお右レクラム文庫版『ハラール詩選』の「結語」に見られる「スイス詩歌の試み(Versuch schweizerischer Gedichten)」中にある表記「詩歌(Gedichten)」は、右メッツラー研究叢書「ハラール」の三三頁に記載された初版「スイス詩歌の試み(Versuch Schweizerischer Gedichten)」とあ

る中の「詩歌 (Gedichten)」を念頭に置いたと考えるならば、誤植とは判断され得ぬであろう。詳細は右メッツラー叢書「ハラー」の三三頁以下を参照。

- (11) マルティニー『ドイツ文学史』第十七版(一九七八年)より共訳、三修社、一九七九年、一六二頁、尾崎盛景訳。原著、第六版、一九七二年、一八一頁。

- (12) この際に「パンとぶどう酒」(一八〇〇年—一〇一年)成立背景に横たわる、ノヴァーリス(一七七二年—一八〇一年)の「夜の讃歌」(シュレーゲル兄弟編「アテネウム」一八〇〇年)も、内容の上から一種の思想詩として逸することができな。

※ところで「思想詩 (Gedankenlyrik)」とはシラーやヘルダーリンの用語ではなく、前者なら前述の言葉で「教訓詩 (Lehrgedicht)」(註(3))と言っているし、後者の場合には一八〇三年十二月ヴィルマンス宛書簡二四五の言葉で「祖国 (ドイツ) の歌 (vaterländischer Gesang)」(註(13)全集、第六卷、四三六頁)とか、或いは「ドイツの歌 (Deutscher Gesang)」(註(13)全集、第二卷、二〇二頁)とでも表現でき得よう。実は当の用語法に関してはトドロフ著「思想詩 (Gedankenlyrik)」(一九八〇年)に詳しく、副題を「十九世紀における或る類概念の成立」(三頁)と附するこの研究書の第一部・第一章「思想詩——一九五〇年代の抒情詩理論の新語」において、「モーリッツ・カリエーレが当概念「思想詩」を初めて定着させた」(二三頁)との論究があり、話題のカリエーレ著「詩歌の本質と諸形式」(Das Wesen und die Formen der Poesie)」(一九五四年)を著者トドロフは筆頭に挙げている。

- (13) シュトゥットガルト版ヘルダーリン全集、一九四六年—七七年(索引は一九八五年)、第一卷、二八頁。

(14) このことはヘルダーリンがシラー宅でゲーテに初対面した折のことがよく示している。つまり一七九四年十一月ノイファア宛ヘルダーリン書簡八九の叙述(全集、第六卷、二四〇頁)によると、詩人はゲーテの名をシラーに告げられても「シラーに全身全霊で (einzig im Innern und Äußern mit Schillen beschäftigt)」あり、表情にしても「また時間がたとうと声にして」も「格別なものを感じさせなかつた見知らぬ人 (einen Fremden, bei dem keine Miene, auch nachher lange kein Laut etwas besonders anden ließ)」つまり初対面のゲーテに無頓着であった。

- (15) シラー全集(註(3))第二〇卷、四五二頁。

- (16) シラー全集(註(3))第二〇卷、四三六頁。
 (17) シラー全集(註(3))第二〇卷、四五三頁。
 (18) シラー全集(註(3))第二〇卷、四五四頁。
 (19) シラー全集(註(3))第二〇卷、四五三頁。
 (20) クロフシュトック「詩歌の言葉について」(「北方の監視人」一七五八年刊)。ハンザー版「作品選集」一九六二年、一〇二四頁。

(21) 以上の叙述で取り扱ったハラー、クロフシュトックからシラー、ヘルダーリンへと至る思想詩生育の過程に関して、更に加えて此所ではエーヴァルト・クライスト(一七五五年—一九九九年)の「春 (Der Frühling)」(一七四九年/五六年)と、ウーツ(一七二〇年—一九六七年)の「弁神論 (Theodicee)」(一七五五年)に言及しておきたい。例えばクライストについては、シラーが「素朴文学と情感文学について」において、「理念によりわれわれを感動させる」(註(15))いわゆる「情感詩人」(註(16))の三巨頭の一人として、「ハラー、クライスト、クロフシュトックにのみ言及したい」(註(3)全集、第二〇卷、四五二頁)との旨を表記している程であり、また「詩人が自作について語る (Dichter über ihre Dichtungen)」フリードリヒ・シラー(二卷本、一九六九年)第一巻に収められたカール・フィリップ・コンツ(一七六二年—一八二八年)の述懐によると、「シラー自身の深遠で厳肅な性格に実に相応しいハラー教訓詩の力溢れる緊密な充実のみを称揚せずに、またウーツ抒情詩の躍動、殊にその壮麗な教訓詩「弁神論」についても、…シラーが最大級の好意を以て語った」(七二六頁)とあることから、各々の代表作である「春」と「弁神論」が十八世紀ドイツ思想詩史上抜き難い佳作と看做されるからである。因みに「弁神論」に関するシラー自身の直接の発言は右記「詩人が自作について語る」第一巻に収められた一七九三年二月二八日付ケルナー(一七五六年—一八三一年)宛書簡(七二六頁—七二七頁)に見られる。

(昭和六二年・一九八七年 六月 四日受理)

(昭和六二年・一九八七年十一月二八日発行)

- 18) „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: NA 20. 454. Vgl. (1) 4).
Aufschwung zu Ideen ... Kraft und Tiefe und ein pathetischer Ernst
... Er ist groß, kühn, feurig, erhaben; zur Schönheit aber hat er
sich selten oder niemals erhoben.
- 19) „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: NA 20.453.
die Dichtkunst ... da sie im Reich der Begriffe oder in der Verstan-
deswelt schlechterdings nicht gedeihen kann.
- 20) Klopstock „Von der Sprache der Poesie“ („Der Nordische Aufseher“ 1758):
Ausgewählte Werke. Hrsg.: Schleiden, Karl. München. Hanser. 1962. S.1016-
1026.

Luther ... Opitz ... Haller ... (S.1018)
Sie gehen auf dem Wege fort, den Luther, Opitz und Haller (ich nenne
diese großen Männer nicht ohne Ursache noch einmal) zuerst betreten
haben. ... (S.1024)

- 21) *Kleist, Ewald Christian(1715-59) „Der Frühling“(1749/56)
Vgl. „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: NA 20.452.
Unter Deutschlands Dichtern in dieser Gattung will ich hier nur
Hallers, Kleists und Klopstocks erwähnen. Der Charakter ihrer
Dichtung ist sentimentalisch; durch Ideen rühren sie uns, nicht
durch sinnliche Wahrheit, ... (Vgl. (1)15)

**Uz, Johann Peter(1720-96) „Theodicee“(1755)
Vgl. „Dichter über ihre Dichtungen. Friedrich Schiller“(2 Bände)
München. Heimeran. 1969. Bd.1. S.726-727.

Karl Philipp Conz(1762-1827)

Ich hörte öfters aus seinem Munde ihn nicht nur die energische
gedrängte Fülle der Hallerschen Lehrpoesien, die seinem eignen
Tiefsinn und Ernst so sehr zusagten, rühmen. Auch von Uzens
lyrischem Schwunge, besonders seiner Theodizee, der herrlichen
Lehrode, die also beginnt:

Mit sonnenrotem Angesichte

Flieg ich zur Gottheit auf, ein Strahl von ihrem Lichte

Glänzt auf mein Saitenspiel, das nie erhabener klang ... ,
sprach er mit dem größten Wohlgefallen und äußerte mehrere Male
den Gedanken gegen mich, er hege den Entwurf, in einem ähnlichen
Gedichte, als Pendant zu diesem, die Resultate der kritischen
Philosophie, von der er damals ganz begeistert war, wie Uz es
hier mit der Leibnizischen versuchte, in einer Art Wettstreit
darzustellen: das Wagestück, mit einem so vorzüglichen Kopfe
wie Uz seine Kraft zu messen, reize ihn!

Schiller an Christian Gottfried Körner Jena, 28. Februar 1793
Ich weiß nicht, ob ich Dir schon davon geschrieben habe, dass ich
damit umgehe eine Theodicee zu machen. Wo möglich so geschieht es
noch dieses Frühjahr, um sie meinen Gedichten einzuverleiben, wovon
ich diesen Sommer eine sehr schöne Edition bei Crusius veranstalte.
Auf die Theodicee freue ich mich sehr denn die neue Philo- (S.726/
S.727) sophie ist gegen die Leibnitzische viel poetischer und hat
einen weit größern Charakter. Außer dieser Theodicee trage ich mich
noch mit einem andern Gedicht, gleichfalls philosophischen Inhalts,
wovon noch mehr zu erwarten ist. Aber davon kan ich Dir jetzt noch
nichts schreiben. Erlauben es meine Umstände so bring ich es auch
noch in meine Sammlung.

9)Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland". In: Forschungsberichte der Universität Kochi fürs Jahr 1984/1985/1986. Bd.33/Bd.34/Bd.35. Geisteswissenschaften. S.13-72/S.1-72/S.1-66. 1985/1986/1987.

10)Haller „Die Alpen und ... "((1)5)). Nachwort. S.98.

Versuch schweizerischer Gedichten

Vgl. „Gedichte und Interpretationen"(Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek) Bd.2: Aufklärung und Sturm und Drang. 1983. S.67-86: Guthke, Karl. Haller. Unvollkommene Ode über die Ewigkeit. S.71.

Versuch Schweizerischer Gedichte.

Vgl. Siegrist, Christoph: Haller. Sammlung Metzler. Bd.57. Stuttgart. 1967.

Versuch Schweizerischer Gedichten. Bern ... 1732. (S.33)

11)Martini, Fritz: Deutsche Literaturgeschichte. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. 6.Aufl. Stuttgart. Kröner. 1972. S.181.

Haller ... in großen Lehrgedichten ... Mit ihm beginnt jene machtvolle Gedankendichtung, die bei Schiller eine reife Vollendung fand.

12)Novalis „Hymnen an die Nacht": „Athenaeum" Hrsg.: Schlegel, August Wilhelm / Friedrich. 3.Bd. 2.Stück. Berlin. 1800.

Vgl. StA((1)13) 6. 436: „das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge" / StA 2. 202: „der deutsche Dichter/Und singt, .../ ... /Den Seelengesang./ ... („Deutscher Gesang" V.17-20)

Vgl. Todorow, Almut „Gedankenlyrik: Die Entstehung eines Gattungsbegriffs im 19. Jahrhundert" Stuttgart. Metzler. 1980. I.Teil. Kap.I: Gedankenlyrik — ein Neologismus der Lyriktheorie der 50er Jahre. S.13.

Moriz Carriere hat den entsprechenden Begriff als erster fixiert. Er machte in der zweiten Fassung seiner Untersuchung über das Wesen der Poesie, 1884, geltend, er habe längst vor Friedrich Theodor Vischer — nämlich 1854 in der ersten Fassung dieser Poetik — die Lyrik der Betrachtung „als Gedankenlyrik bezeichnet" und Vischer habe diesen Ausdruck dann in seiner Ästhetik(1846-1857) lediglich „adoptiert".

Vgl. S.125: „Das Wesen und die Formen der Poesie"(Leipzig 1854)

13)Hölderlin „Mein Vorsatz" 3.Str. V.11-12: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. Kohlhammer. 1946-77(Register 1985). Bd.1. S.28 (=StA 1. 28).

Ists schwacher Schwung nach Pindars Flug? ists 11

Kämpfendes Streben nach Klopstocksgröße? 12

14)Hölderlin. Brief 89. Nov.1794: StA 6. 140.

Auch bei Schiller war ich schon einigemale, das erstemal eben nicht mit Glück. Ich trat hinein, wurde freundlich begrüßt, und merkte kaum im Hintergrunde einen Fremden, bei dem keine Miene, auch nachher lange kein Laut etwas besonders ahnden ließ. Schiller nannte mich ihm, nannt' ihn auch mir, aber ich verstand seinen Nahmen nicht. Kalt, fast one einen Blick auf ihn begrüßt ich ihn, und war einzig im Innern und Außern mit Schillern beschäftigt; der Fremde sprach lange kein Wort.

15)„Ueber naive und sentimentalische Dichtung": NA 20. 452.

durch Ideen rühren sie uns, ...

16)„Ueber naive und sentimentalische Dichtung": NA 20. 436.

Der Dichter, sagte ich, ist entweder Natur, oder er wird sie suchen. Jenes macht den naiven, dieses den sentimentalischen Dichter.

17)„Ueber naive und sentimentalische Dichtung": NA 20. 453.

Noch, ich gestehe es, kenne ich kein Gedicht in dieser Gattung, weder aus älterer noch neuerer Litteratur, welches den Begriff, den es bearbeitet, rein und vollständig entweder bis zur Individualität herab oder bis zur Idee hinaufgeführt hätte. ... Dasjenige didaktische Gedicht, worinn der Gedanke selbst poetisch wäre, und es auch bliebe, ist noch zu erwarten.

Vgl. Haller „Die Alpen und andere Gedichte“ (Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1965) auf der Textgrundlage der „Haller Gedichte“ hrsg. von Ludwig Hirzel (Frauenfeld 1882). Auswahl und Nachwort von Adalbert Eischenbroich. S.114.

Haller für Kant der „erhabenste unter allen deutschen Dichtern“ gewesen Vgl. Kant: Werke. 11 Bände. Hrsg.: Cassirer, Ernst. Bd.1. Hrsg.: Buchenau, Arthur. 1912. S.317. Vgl. S.531(Lesarten).

der erhabenste unter den deutschen Dichtern

6) Kant „Kritik der reinen Vernunft“ 2.Aufl. 1787. S.641: Werke. Akademie-Textausgabe. Unveränderter photomechanischer Abdruck des Textes der von der Preußischen Akademie der Wissenschaften 1902 begonnenen Ausgabe von Kants gesammelten Schriften. Berlin. Gruyter. 1968. Bd.3. S.409.

Selbst die Ewigkeit, so schauerhaft erhaben sie auch ein Haller schildern mag, macht lange den schwindelichten Eindruck nicht auf das Gemüth; („Kritik der reinen Vernunft“ 1.Aufl. 1781. S.613)

7) Hegel „Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften“ I. Teil: „Die Wissenschaft der Logik“ §104. Zusatz 2: Werke. Auf der Textgrundlage der „Werke“ (1832-45). Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1969-71 (Register 1979). Bd.8. S.220.

Wir finden z.B. bei Haller eine berühmte Beschreibung der Unendlichkeit Gottes, worin es heißt:

Ich häufe ungeheure Zahlen,
Gebirge Millionen auf,

... („Unvollkommenes Gedicht über die Ewigkeit“ 1736. V.67ff.)

Hier haben wir also zunächst jenes beständige Hinausschicken der Quantität und näher der Zahl über sich selbst, welches Kant als schauerhaft bezeichnet, worin indes das eigentlich Schauerhafte nur die Langweiligkeit sein dürfte, daß beständig eine Grenze gesetzt und wieder aufgehoben wird und man somit nicht von der Stelle kommt. Weiter fügt nun aber der genannte Dichter zu jener Beschreibung der schlechten Unendlichkeit treffend noch als Schluß hinzu:

Ich zieh sie ab, und du liegst ganz vor mir -

74

(*„Versuch Schweizerischer Gedichte“ 11.Aufl. 1777. V.75:

Ich tilge sie, und du liegst ganz vor mir.

Vgl. DNL-Haller(I. Anmerkung *) S.111/ Reclam-Haller(I(1)5)) S.77) womit dann eben ausgesprochen wird, daß das wahrhaft Unendliche nicht als ein bloßes Jenseits des Endlichen zu betrachten ist und daß wir, um zum Bewußtsein desselben zu gelangen, auf jenen progressus in infinitum zu verzichten haben.

Vgl. „Wissenschaft der Logik“ (1812) I. Buch. 11. Abschn. 2. Kap. C. b.: Werke. Bd.5. S.266.

8) Lessing „Laokoon“ (1766) Kap. XVII: Werke. Bongs Goldene Klassiker Bibliothek. 25 Teile. 1925/1929/1935. Reprographischer Nachdruck: Hildesheim. Olms. 25 Bände. 1970. Bd.4(4. Teil). S.368.

der Kunstrichter, der ihr dieses übertriebene Lob erteilet, muß sie aus einem ganz falschen Gesichtspunkte betrachten haben; er muß mehr auf die fremden Zieraten, die der Dichter darein verwebet hat, auf die Erhöhung über das vegetative Leben, auf die Entwicklung der innern Vollkommenheiten, welchen die äußere Schönheit nur zur Schale dienet, als auf diese Schönheit selbst, und auf den Grad der Lebhaftigkeit und Ähnlichkeit des Bildes, welches uns der Maler, und welches uns der Dichter davon gewähren kann, gesehen haben.

*Haller, Albrecht(1708-77) „Über den Ursprung des Übels“(1734) I.Buch. V.131-142: Deutsche National-Litteratur. Historisch kritische Ausgabe. 41.Band. 2.Abteilung. Haller/Salis=Seewis. hrsg. v. Adolf Frey. Stuttgart/Berlin. W.Spemann. ca.1885. Sansyusya. Neudruck 1974. S.90-91.

O Vater! Rach' und Haß sind fern von deinem Herzen,
 Du hast nicht Lust an Qual, noch Freud' an unsern Schmerzen,
 Du schufest nicht aus Zorn, die Güte war der Grund,
 Weswegen eine Welt vor nichts den Vorzug fund!
 Du warest nicht allein, dem du Vergnügen gönntest, 135
 Du hießest Wesen sein, die du beglücken könntest,
 Und deine Seligkeit, die aus dir selber fließt,
 Schien dir noch seliger, so bald sie sich ergießt. S.90
 Wie daß, o Heiliger! du dann die Welt erwählet, S.91
 Die ewig sündiget und ewig wird gequälet? 140
 War kein vollkommner Riß im göttlichen Begriff,
 Dem der Geschöpfe Glück nicht auch entgegenlief?

.....
 141. Riß, Grundriß, Plan.

Vgl. Reclam-Haller((1)5)) S.58: Riß = Grundriß, Plan.

(1)VORWORT

1) Meyers Handbuch über die Literatur. 2.Aufl. Mannheim. Bibliographisches Institut. 1970. S.376.

Haller ... Lehrgedichte und Staatsromane machen im wesentl. sein dichter. Werk aus.

2) Haller, Rudolf: Geschichte der deutschen Lyrik: 2 Bände. Sammlung Dalp. Bern. Francke. Bd.1. 1967. 2.Abschn.: Das Zeitalter der Aufklärung. 4.Kap. „Lehrdichtung“(S.228-243).

3) Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“(1795-96): Werke. Weimarer Nationalausgabe (=NA). Bd.20. 1962. S.453.

der abstrakte Begriff herrschet, ... Was hier im allgemeinen von allen Lehrgedichten gesagt wird, gilt auch von den Hallerischen insbesondere.

4) „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: NA 20. 454.

Nur überwiegt überall zu sehr der Begriff in seinen Gemälden, so wie in ihm selbst der Verstand über die Empfindung den Meister spielt. Daher lehrt er durchgängig mehr, als er darstellt, und stellt durchgängig mit mehr kräftigen als lieblichen Zügen dar. Er ist groß, kühn, feurig, erhaben; zur Schönheit aber hat er sich selten oder niemals erhoben.

5) Kant „Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels“(1755) II. Teil.

7. Hauptstück: Werke. 12 Bände. Frankfurt am Main. Suhrkamp. Bd.1. 1968 S. 335. Vgl. Akademie-Textausgabe(Anm.6)). Bd.1. S.314.

Die Schöpfung ist niemals vollendet. ... Man kann von ihr dasjenige sagen, was der erhabenste unter den deutschen Dichtern von der Ewigkeit schreibt:

Vgl. Kant: Gesammelte Schriften. Hrsg.: Preußische Akademie der Wissenschaft. I.Abt.: Werke. Bd.1. Berlin. Georg Reimer. 1910. S.314.

Man kann von ihr dasjenige sagen, was der erhabenste unter den deutschen Dichtern von der Ewigkeit schreibt:

Unendlichkeit! wer misset dich?

.....

Vgl. „Lesarten“ dazu: S.558.

(1) VORWORT

Hallers lyrische Werke werden im „Handbuch der Literatur“(I(1)1) „Lehrgedichte“ genannt oder „Lehrdichtung“ in der „Geschichte der deutschen Lyrik“(I(1)2). Darunter dürfte man sich heute leicht moralisierende Episteln vorstellen, die nach Predigt schmecken. Schon Schiller kritisiert in seiner Abhandlung „Über naive und sentimentalische Dichtung“(1795-96) ihre „didaktischen“ Eigenschaften: „Nur überwiegt überall zu sehr der Begriff in seinen Gemälden, so wie in ihm selbst der Verstand über die Empfindung den Meister spielt. Daher lehrt er durchgängig mehr, als er darstellt“(I(1)4); „der abstrakte Begriff herrschet, ... Was hier im allgemeinen von allen Lehrgedichten gesagt wird, gilt auch von den Hallerischen insbesondere.“(I(1)3).

Ähnliches läßt sich freilich auch von Schillers eigener Gedankenlyrik sagen. Seine Kritik an Haller richtet sich im Grunde gegen ihn selbst: „Noch, ich gestehe es, kenne ich kein Gedicht in dieser Gattung, weder aus älterer noch neuerer Litteratur, welches den Begriff, den es bearbeitet, rein und vollständig entweder bis zur Individualität herab oder bis zur Idee hinaufgeführt hätte.

... Dasjenige didaktische Gedicht, worinn der Gedanke selbst poetisch wäre, und es auch bliebe, ist noch zu erwarten.“(I(1)17). Gedichte, die „den Begriff rein und vollständig bis zur Individualität herabgeführt“ haben, wären vielleicht „Selige Sehnsucht“ (1814) und „Wiederfinden“(1815) in Goethes „West-östlicher Divan“, und solche, die „den Begriff rein und vollständig bis zur Idee hinaufgeführt“ haben, etwa Hölderlins „Hälfte des Lebens“(1802f.) und „Andenken“(1803). Obzwar die „herabgeführte“ Dichtung eher auf grüne Seitenzweige kommt, bildet andererseits die „zur Idee hinaufgeführte“ den Stamm der Gedankenlyrik, in dem „der Gedanke selbst poetisch“ wie Pflanzensaft zum Gipfel des Baums emporsteigt.

Als anfängliche Jahresringe erschienen Hallers „Lehrgedichte“ in den dreißiger Jahren des 18. Jahrhunderts: „Die Alpen“ und „Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben“ in der ersten Auflage von Hallers „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 1732, „Über den Ursprung des Übels“ in dessen zweiter Auflage 1734 und „Unvollkommenes Gedicht über die Ewigkeit“ in der dritten Auflage 1736. In „Von der Sprache der Poesie“(1758) schätzt Klopstock Hallers dichterische Leistung ähnlich hoch ein, wie die von Opitz im 17. Jahrhundert oder die von Luther im 16. Jahrhundert (I(1)20). Im 17. Kapitel von „Laokoon“(1766) erkennt Lessing eine gedankliche „Entwicklung der innern Vollkommenheiten“ bei Haller an, obwohl diesen „innern Vollkommenheiten“ „die äußere Schönheit nur zur Schale dienet“(I(1)8): „Er ist groß, kühn, feurig, erhaben; zur Schönheit aber hat er sich selten oder niemals erhoben.“(I(1)18). Die Aufgabe, „äußere Schönheit“ mit „innerer“ „Erhabenheit“ in Einklang zu bringen, hinterließ Haller der Nachwelt.

DAS MORGENGRAUEN DER DEUTSCHEN GEDANKENLYRIK
— HALLERS „VERSUCH SCHWEIZERISCHER GEDICHTE“
(1) VORWORT

TAKAHASHI, Katsumi

(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KOCHI (JAPAN)
FÜR DAS JAHR 1987. Vol.36. GEISTESWISSENSCHAFTEN

INHALTSÜBERBLICK

(I) DAS MORGENGRAUEN DER DEUTSCHEN GEDANKENLYRIK

- | | |
|--|-----------------------------|
| (1) Vorwort | S.2-S.4 (Vol.36. S.44-S.46) |
| (2) Der Konflikt zwischen Alt und Neu | |
| (3) Schönes und Erhabenes | |
| (4) Gelehrsamkeit und Fragen | |
| (5) Die der Erkenntnis kundige Mimesis | |
| (6) Das Reich der Schatten | |
| (7) Schlußwort | |

QUELLENACHWEIS

(Vol.36. S.47-S.52)

Zum Verständnis dieser Arbeit

(Vol.36. S.53-S.54)

ZUM VERSTÄNDNIS DIESER ARBEIT

Von alters her geht es in der japanischen Lyrik zumeist um die Natur und um seelische Gefühle, etwa um Blumen oder Vögel und die Empfindungen, die sie hervorrufen. Daher befassen sich japanische Germanisten eher mit der Natur- und Erlebnislyrik, den Balladen und den kurzen Liedern des 18. Jahrhunderts, und gehen der gleichzeitigen Gedankenlyrik, welche die emotionalen Schwingungen des menschlichen Bewußtseins mit komplexen Reflexionen und Meditationen zu durchdringen versucht, lieber aus dem Weg. Die umfangreichen Sinfonien der deutschen Musik von Beethoven bis Mahler, die wie die Gedankendichtung des 18. Jahrhunderts lyrisches Erleben mit folgerichtigerem Denken in eine Übereinstimmung zu bringen versuchen, ergreifen auch uns, Japanern freilich mit ihrer Ausdruckskraft, obwohl doch eine solche Verbindung, wie etwa die von Öl und Wasser, nur selten gelingen kann. Mit hin könnte es eine Aufgabe auch der japanischen Wissenschaft sein, uns die deutsche Gedankendichtung so eindringlich zu verlebendigen, wie etwa ein gutes Orchester eine große Sinfonie. Dabei dürfen dichterische Denkformen nicht mit rhetorischer Beredsamkeit umschrieben werden, da sie sonst allenfalls der Erbauung dienen würden, anstatt von den ontologischen und erkenntnistheoretischen Anstrengungen in der Gedankenlyrik Hallers zu zeugen.